

ラテン語学における文法化研究

小倉 博行

認知言語学や言語類型論などの研究が発達するにつれて、「文法化」というテーマが言語学の一分野として確立されつつある。文法化とは、かつて独立した意味を持つ単語が、その自律性を次第に失い、接辞や助動詞といった文法機能を担う要素へと変容する過程である。例えば、「持っている」を表すラテン語の *habeo*¹ が、フランス語では、過去分詞と共に用いられると過去時制を表す助動詞として機能している (*j'ai mangé* 「私は食べた」)。さらにこの *habeo* は、不定詞とも用いられ、今では多くのロマンス語の未来形の語尾となっている (*je mangerai* 「私は食べるだろう」)。

このようなアプローチを旨とする文法化研究は、その性格上、歴史的視点が不可欠であり、2,000年以上の長きにわたる言語変化の様子を見せてくれるという意味で、非常に貴重な資料を提供するラテン語、そしてその子孫であるロマンス語研究においても、このような文法化研究が少しずつ熱を帯びてきている。本論では、ラテン語学におけるいくつかの文法化研究、あるいは文法化というテーマに重ね合わせることでできる研究を紹介しようと思う。

まずはじめに、アメリカのワシントン大学の言語学科で教鞭をとる Jurgen KLAUSENBURGER 氏である。氏は主にラテン語の音韻論や形態論の研究を出発点とし、2000年に刊行された、いわば集大成ともいえる著書では *Grammaticalization --- Studies in Latin and Romance Morphosyntax* (Benjamins) といったように、文法化という用語を看板に掲げている。本書では、それまでに提起されたいく

つかの文法化に関する理論を援用して、ラテン語の言語変化を観察する試みがなされている。

彼が採用する理論は主に以下のものである。

- (1) paradigm structure conditions
- (2) system defining structural properties
- (3) Left-Branching, Right-Branching

(1)は、言語変化の過程で、不規則なものを排除し、形態的変異を抑制しようという働きである。(2)は、品詞の枠を越えてシステム全体の整合性を求める作用である。これら二つの理論は、WURZEL(1989)ⁱⁱによって提唱されたものである。(3)はBAUER(1995)ⁱⁱⁱによるもので、これについては少し詳しく説明する必要があるだろう。伝統的な用語を使えば、主要部の左側に補部が置かれる状態をLeft-Branching、これとは反対に主要部の右側に補部が張り出したものをRight-Branchingと呼ぶ。Bauerは、ラテン語からフランス語への文法体系の変化をLeft-BranchingからRight-Branchingへの推移と特徴づけている。

ラテン語を出発点とするロマンス語史の中で、いわゆる反復相(frequentative)の接尾辞を持つ形が、それを持たない形よりも優先される、という現象がしばしば観察される。例えば、ラテン語で「歌う」を表す動詞はcanoであった。しかし、イタリア語cantare、スペイン語cantar、フランス語chanterを見て分かるように、ロマンス語は、反復相を表すcanto「何度も歌う」「繰り返し歌う」を採用した(その際、反復の意味は消えている)。この背景に、(1)のparadigm structure conditionsという作用が働いたと考えるのである。canoとcantoは、それぞれ第三、第一と呼ばれる異なる活用タイプに属している。第一活用に属す動詞は、-v-による完了形(canto cantavi)をほぼ規則的に作ることができるのに対して、第三活用の動詞は、規則的に完了形を得ることがむずかしい。そこで口語ラテン語の使用者たちは、平易な第一活用に属すcantoを選んだのである。またフランス語donner「与える」は、ラテン語の不規則動詞

doではなく、やはり第一活用に属していたdonoを語源としている。ラテン語では「与える」を意味する場合、不規則動詞のdoを用いるのが普通である。

ラテン語の名詞は語尾の形が格、数、場合によっては性を明示する。これに対して、現代フランス語の名詞は、それ自体では格の標識を持たず、さらにhomme / hommesのように音声上は単数と複数を区別しない。加えて、-tionや-mentといった特定の語尾以外は性を明確にしない。このことは、名詞ばかりではなく、動詞についても言える。ラテン語の動詞は語尾によって主語の人称と、単数・複数を明らかにするが、フランス語の動詞語尾はと言えば、特に音声上はラテン語に比べてそうした働きが弱い。つまり、名詞、動詞を問わず、みずからの文法的ステイタスを示す有標的な手段を担う体系から、そうした機能上の標識を持たない体系へと推移したということである。(2)のsystem defining structural propertiesという働きが、品詞という枠を越えた体系全体の整合性をもたらし、有標から無標へとそのシステムを変えたと考えるのである。

最後に、(3)について、やはり具体例を挙げながら解説しよう。まず、動詞と目的語を、それぞれ主要部と補部の関係にあると考えると、通常ラテン語はlibrum lego「私は本を読む」のように補部が主要部の左側に位置する。これに対してフランス語はje lis un livreと、補部は主要部の右側に位置する。このことはフランス語の未来形についても観察されると指摘する。je chanterai「私は歌うだろう」というRight-Branching構造は、ラテン語CANTARE HABEOというHABEOを主要部とするLeft-Branchingだったのが、HABEOが屈折要素となったことで主要部がCANTAREに移った結果であると分析する。一方、フランス語の過去形j'ai chanté「私は歌った」は、HABEO CANTATUMをベースにしており、このラテン語の状態からすでにRight-Branching構造であるとしている。

しかしながら、氏の理論について、特に(3)に基づいた分析には問題点がないわけではない。それぞれje chanterai, j'ai chantéは、CANTARE HABEO, HABEO CANTATUMから出発したとしている

が、これらラテン語の理論モデルについて一切言及がないのである。フランス語の未来形と過去形の原型がCANTARE HABEO, HABEO CANTATUMという語順からなる表現であるとする根拠は、やはり文献的に例証されなければならないだろう。HABEO CANTATUM式の表現は、その語順はともあれ、プラウトゥス（紀元前254頃～184）のような古拙期のラテン語にも観察され（ただし過去形としての価値は持っていないようである）、モデル構築のための文献学的資料を得ることは可能だが、未来形の原型の文証はかなり時代の下った文献をあたるより他にないし、また実際に例を見つけられるかどうかといった不確定要素もある。しかし、こうした作業がなされない限り、提唱されているモデルに説得力を持たせることは難しいのではないかと思われる。また、文法化の議論で、文法化が一方方向性なのかどうかしばしば議論になるが、仮に一方方向性だとしても、Left-BranchingからRight-Branchingへ向かうのであって、その反対ではないのはなぜか、といった疑問に対しても答えを用意する必要があるだろう。

次に、Ursula BECK氏による、古拙期におけるラテン語の動詞の振る舞いを細かく観察した研究を紹介しよう。彼女の精細な分析は*La linguistique historique et son ouverture vers la typologie*, 2002, L'Harmattanにまとめられている。本書の主旨は、時制およびアスペクト、態、行為項（actance）の連動性を読み取ることにある。また、この試みに用いられた資料が、ラテン語においてまとまった文献が残っている最古の作家プラウトゥスの作品である点も特徴的である。

ラテン語の接尾辞 *-ē-* は、*doleo* 「嘆く」（不定詞は *dolēre*）のような第二活用と呼ばれる動詞群の現在形の形成に関わっており、本来は変化のない状態を表す。この *-ē-* が消える完了形（*dolui*）では動詞接頭辞によって状態の変化が示されることがしばしば観察されるとしている（ex. *condolui*）。また、*nascor* 「生まれる」のような、現在形で起動相の接尾辞 *-sc-* を持つ動詞の完了形においても、やはり同様の現象を見てとることができる。例えば現在形で *-sc-* を持

つ動詞の完了形のうち、接頭辞を伴わずに用いられる動詞は20%、接頭辞が用いられたり用いられなかったりする動詞は50%、必ず接頭辞と共に用いられる動詞は30%である。言い換えれば、パラダイム化された動詞時制の選択によってではなく、動詞の構成要素となるアイテムがまだ自立性を保持しており、それらの組み合わせによって動詞の表す様態が実現していることが窺えるのである。つまり、学習書に掲げられるようなラテン語動詞の活用体系が出来上がる前夜の言語状態がかいま見えるということである。一方で、しかも、動詞接頭辞に用いられるアイテムはex-やin-など元来空間概念を表すものだったが、そうした用いられ方はごくわずかであるということも指摘されている。動詞接頭辞に空間概念があまり読み取れず、アスペクト的な標識に傾いているということから、接頭辞については、すでに文法化が進んでいたとも言えよう。

本書の副題から分かるように、彼女は言語類型論的な観点からもプラウトゥス時代のラテン語の言語状態について言及している。彼女が引用するHOPPER & THOMPSON (1980)^{iv}にあるように、動作を表す表現は動作主と、反対に状態を示す表現は被動作主と結びつきやすい。一般的に言えば、前者と後者は、それぞれ他動性の高いタイプと低いタイプに属している。ところで他動性の最小値にあたるのが非人称文であるが、*taedet*「退屈だ」「嫌だ」のような、先に挙げた、変化のない状態を表す接尾辞-ēを持つ一群の非人称動詞は、言語類型論からのこうした指摘に合致している。さらに興味深いのは、これらの非人称動詞の完了形には、*taedit*のような第二活用によく見られる -u-の形成ではなく、*taesum est*といった受動完了に用いられる迂言形式が観察されることである。*taesum*は完了分詞の中性単数形で、中性は元来無生類を表していた。言語類型論では非人称タイプと無生類との親和性が指摘されており、今回の*taesum est*という形式も、この指摘と重なってくる現象である。

ロマンス語が誕生した背景には、書き言葉としてのラテン語ではなく、口語ラテン語がベースとなっている。従ってロマンス語史をその出発点から考察しようとするれば、この口語ラテン語の存

在を無視することはできないはずである。しかしながら、容易に想像されるように、口語ラテン語は、その性格上、全貌を捉えることはほとんど不可能といってよく、せめてその一部をかいま見るにしても、書記ラテン語に比べると極めて資料に乏しい。1世紀頃の文法家プロブスの著作に付け加えられた、3,4世紀頃のものとされる誤謬の一覧(『プロブス付表』)や、現在のドイツのライヒェナウ修道院で8世紀頃に作成されたと考えられている語彙注解(『ライヒェナウ注解』)、さらに各地に分布する石碑に刻まれたラテン語の文言を集めた『ラテン語碑文資料集』などが挙げられる程度である。

そうした困難な状況にあって、Michel BANNIARD氏は、*Viva voce : communication écrite et communication orale du IV^e au IX^e siècle en occident latin*(1992)以来、一貫してこの口語ラテン語の特徴に着目しつつ、フランス語を生ぜしめた過程を浮き彫りにしようとしている。例えば、前置詞adと動名詞によって「目的」を表すのが規範的なラテン語であるが、不定法のみで目的を意味することがある。このことは、従来ならば「誤用」ですまされてしまうこの表現が、実はすでに当時のラテン語では、話者同士でコミュニケーション上の問題を引き起こすことがなかったことを示している(«Diasystème latinophone et interactions communicationnelles (III^e-VIII^e s.)» in *Mémoires de la société de linguistique de Paris*, XI, 2001)。言い換えれば、話者の一方が口にしたこの形式が、他方にとって初めて耳にするものであったとしても、誤解することなく、十分に意味を捉えることが可能な、表現としての意思疎通力(potentialité)をすでに獲得していたと考えるのである。

また、*Information grammaticale* (2005)に掲載された最新論文«Prototypes latins de la migration à gauche des morphèmes suffixés»では、ros-a「バラは」のようなラテン語の「語幹+語尾」という構成と、これに対応するフランス語のune / la roseに見られる「冠詞+名詞」との比較が行われている。それぞれをlexème+suffixe / préfixe+lexèmeという図式に置き換えながら、その変遷を論じて

いる。動詞においてもこの分析を適用している。フランス語において義務的な主語人称代名詞もやはり、ラテン語の *ama-t* 「彼は愛する」と、それに対応するフランス語 *il aime* から見てとれるように、こうした *lexème+suffix* から *préfixe+lexème* へ、という展望のもとに捉えられるとしている。これはまさに、先に挙げた Right-Branching (ラテン語) と Left-Branching (フランス語) や、品詞の種類に関わりなくシステム全体の整合性を目指す働き *system defining structural properties* といった考え方と重なっている。

以上、3人の研究者とその分析手法を紹介したが、面白いことに後者の二人は「文法化」というテーマを意識しているわけではない、あるいは意識しているとしてもそれをキーワードとして全面に打ち出してはいない。ロマンス語史の研究においてもっとも着目されるものの一つが、その文法体系の大幅な変化であり、それに取り組もうとすれば、従来より必然的に、この「文法化」的な性格を帯びたアプローチになると言えよう。

ⁱ ラテン語は長母音を持っていたが、慣用にならって原則として表記しない。しかし必要な場合は当該の母音の上にバーをのせる形で長母音を表すこととする。

ⁱⁱ WURZEL, Wolfgang (1989) : *Inflectional Morphology and Naturalness*. Dordrecht, Kluwer.

ⁱⁱⁱ BAUER, Brigitte (1995) : *The Emergence and Development of SVO Patterning in Latin and French : Diachronic and Psycholinguistic perspectives*. New York, Oxford UP.

^{iv} HOPPER, P. J. & THOMPSON, S. A. (1980) : "Transitivity in Grammar and discourse" in *Language* 56(2):251-299.